

実らなかった川田龍吉男爵の想い

－「サムライに恋した英国娘」を読んで－

男爵薯は北海道をはじめ全国で栽培され、日本に導入されてから100年近くになる今日でも食用ジャガイモの王座を占めています。北海道函館市郊外七飯村（現亀田郡七飯町）で農場を経営していた川田龍吉男爵がこのイモの種を輸入し、試作したことは広く知られているところですが、没後すでに60年近くが経ち、男爵と直接に交際した人たちも多くは世を去り、世人の記憶から遠ざかってゆくのは、時の流れとして致し方のないことでしょう。このたび函館市にお住まいの主婦戸村博子様から、これらに関する新刊書その他関係資料の提供をいただきました。知られざる男爵の人柄、魅力などに触れ、感慨もひとしおでしたが、提供下さった資料を整理し、とりまとめ、男爵の歩んだ道と男爵薯誕生の経緯についてここに紹介いたします。

（編集部）

1. 親しまれ愛される男爵薯

日本のジャガイモのなかで、男爵薯は多くの人に親しまれ、愛されているものはないであろう。昭和のはじめ頃から広くつくられるようになり、最近キタアカリなど新しい品種が次第に市場に出まわるようになって、なお食用ジャガイモとしての王座を守っている。

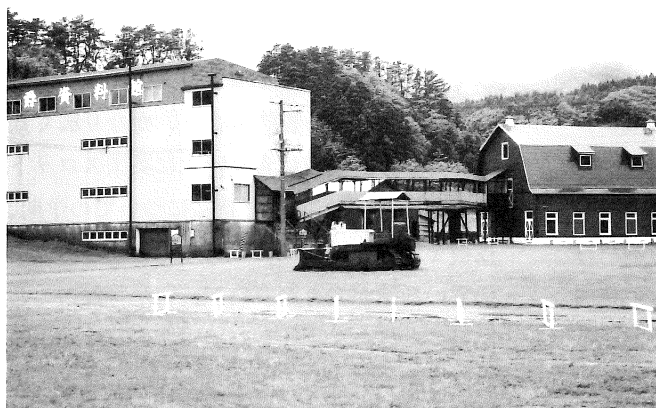
このイモが日本でつくられるようになったいきさつについては、すでに知られているところであるが、函館に住む私にとっても身近な食品であり、いつもいろいろと調理に工夫をこらして賞味している。

川田龍吉男爵は、いわゆる農業技術の専門家ではないが、その経歴、業績については、これらを紹介する書物もあり、かなり広く知られている。龍吉は青年時代に英国スコットランドに留学し、造船、造機についての学問、技術を修得し、帰国後これらを活かし海運関係での功績が大きかったが、留学時代のくわしいことはあまり知られていなかった。このたび「サムライに恋した英国娘」（副題－男爵いも、川田龍吉への恋文）と題する本がF書店から出版され、これには龍吉がスコットランドで英国女性と交わした手紙の内容が詳しく記されている。手紙は女性から龍吉にあてたもので、100通近くが、以前龍吉が建設した渡島当別の農場跡から発見されたのであるが、龍吉と女性との交際のありさまが述べられているだけでなく、それをとおして当時のスコットランドの文化、社会情勢、生活習慣などを知ることができる。

この本のあらましの紹介と、それについての思いを少々述べてみたい。

2. 激動の少年時代

川田龍吉は幕末の安政3年（1856）に土佐郷士川田小一郎、美津の長男として杓田村（現高知市旭元町）に生をうけている。郷士は、身分は武士であるが、農民と同じように田畑を耕して生計をたてなければならない「半農半武」であり、多くは庄屋、年寄として村の統治にたずさわっていた。暮らしは貧しく、龍吉は幼いころから野良に出て、作物、野草など自然に触れるのを楽しんでいたが、



中年以後北海道で農業に精を出す基は、この頃に培われたのであろう。

父小一郎は貧しい郷士であったが、経済感覚にすぐれ、また身分の向上を常に望んでいたようであるが、幕末で激動の時代と、人との出会いが、その能力を発揮する機会を与えている。出入りしていた藩士の推挙によって藩の役所の会計方に仕出し、土木、鉱山などの実務にかかわり、ついで大坂で土佐商会責任者で藩士の岩崎彌太郎と出会い、その鉱山

経営で業績をあげる。彌太郎はこれからの英語の必要性からアメリカ人教師を大坂に招いて英語塾をひらいたが、小一郎は息子の龍吉に四年間実用英語を習得させる。

土佐商会はのち三菱商会と改め、維新後東京に移転するが、鉱山経営で実績をあげた小一郎一家も東京に移り住むことになった。

3. 三菱鉄工所の設立と龍吉の渡英

鉱山とともに海運は三菱の中核となる事業であって、国内で船を修理する鉄工所建設が必要となり、英国スコットランド、グラスゴーの造船所から技師が派遣されることとなり、造船所のオーナーが来日した際に小一郎がオーナーに龍吉をグラスゴーで教育してもらいたい、と願い、承諾をもらって龍吉の渡英が実現することとなった。



上 男爵資料館（上磯郡上磯町当別）
下 同館の案内板

明治10年（1877）3月、龍吉は英国に出发し、グラスゴーでは造船所のオーナーであるヘンリー・ロブニッツ夫妻が身元引受人となり、グラスゴー近くのレンフリーユにあるロブニッツ造船所で実習に携わる。実習は造船所での初歩的な技能を身につけたのち、グラスゴー大学工学部に入学し、優秀な成績で課程を修了し、ふたたび造船所にもどり、専門高度の技術を習得した。

造船所での実習は、肉体、頭脳ともに相当に疲労する厳しいもので、そのうえ異文化のスコットランドで、ときには東洋人に対しての蔑視の眼が注がれることもあったが、龍吉はそれに堪え、休日には田園地帯を散策して疲れをいやした。農村の風物は彼に故郷の土佐を思い出させたが、美しく咲くジャガイモの花にはとくに心をひかれるようであった。

4. ジニー・イーディーとの出会い

渡英して4年たち、龍吉は東京の親から帰国をうながす便りを受けとるが、しっかりと技術を身につけたいとの思いの彼は、レンフリーユに留まつて実習をつづけることとなる。留学6年目、造船実習もあと1年半となった明治16年（1883）1月、龍吉はグラスゴー駅近くの書店にゆき、必要な本を求めようとするが、それは店にはなく、出版社に注文し、取り寄せることとなった。そのとき対応した女性店員から数日後に手紙が届き、注文を確認する内容が記され、差出人はジニー・イーディーとあった。そこで次の週の土曜日に彼は同書店に赴き、あらためて書籍の注文を済ませ、いろいろな本のことなどについてジニーと話しこみ、遅くなったので彼女を家まで送っていった。

その後龍吉とジニーとは手紙の往来で、用件のほか、近況などを知らせ合ったが、彼女の便りではジニーが熱心なキリスト教徒であり、教会の仕事、慈善事業に強い関心をもっていること、龍吉にもキリスト教を知ってもらいたいこと、龍吉の健康が不調のとき、気分の減入ったとき、また龍吉が心ない人たちから不愉快な仕打ちを受けたとき、の励まし、などが述べられ、次第に二人が心を通わせ、愛し合い、休日に会うのを楽しみとするようになってゆく。

同年7月にジニーと母親、それに龍吉はスコットランドの保養地で数日の休暇を過ごしたが、そのときの畑一面の白いジャガイモの花は龍吉にとって非常に印象深いものであった。

やがて二人は婚約の相談をし、ジニーの母も賛成の様子であったが、ジニーとの交際、将来のことなどを東京へ手紙にしたため、承諾を求めているものの、回答はなく、彼は父小一郎をはじめ一族が、果たして承諾してくれるかどうか、恐らく賛成がもらえない、と心配するようになり、またジニーも日本へ旅した英国人宣教師その他の話から、日本では外国人の受入れが難しいとの様子をきき、結婚の可能性について疑念を感じはじめるようになる。

5. 裂かれた恋

明治17年（1884）1月龍吉とジニーが交際をはじめてから丁度1年後、ジニーはグラスゴーの書店を辞めてイングランド、サンダーランドの書店で働くことになるが、これは彼女の意思よりも教会でのジニーの活動を高く評価した筋の意向が強く働いたためである

う。この時点では龍吉はまだあきらめず、両親の承諾はもらっていなかったけれども、あくまで拒否されるとは考えていなかった。

一方、実習を終えた龍吉の帰国は船の都合によって予定より早まり、1884年6月はじめとなり、突然の変更でジニーとの別れは慌ただしかった。

同年8月帰国した龍吉は、父小一郎を必死に説得しようとしたが聞き入れられず、ジニーは龍吉を待ったが彼はもどらない。彼女から東京の龍吉への便りは、彼が手にする前に小一郎により処分されたであろうし、恐らく龍吉からもスコットランドのジニーに手紙を出したであろうが、その内容は知ることはできない。ジニーは日本へ便りすることを諦めるを得なかった。

明治20年（1887）龍吉は土佐小高坂村の郷士、楠瀬齋民の長女楠瀬春猪と結婚する。

6. 造船界での活躍と農業経営

英国から帰国したあと、龍吉が習得した技術を活かしての活躍の様子は、いろいろの書物で紹介されているとおりであるが、日本郵船機関監督となり、明治30年横浜船渠の社長となる。その前年の明治29年、父小一郎の死去にともなって男爵となるが、小一郎は明治22年（1889）日本銀行の総裁に就任、同28年に日清戦争（明治27、8年）の戦費調達の功績によって男爵の爵位を授けられていた。

横浜船渠は順調に事業を続けたが、のち財政状況の悪化をきっかけに会社幹部と意見が合わず、頑固な龍吉は辞任を決意する。同36年に横浜船渠を辞したあとは、軽井沢に購入した200町歩（200ヘクタール）の土地

を耕し、西洋野菜を栽培し、外国人の避暑客などから好評を得たが、軽井沢の用地は父の遺産で購入した。龍吉の農業経営は長く続かず、同39年経営不振下にあった函館船渠再建を依頼され、引き受けて同社社長となる。龍吉の努力で新たに融資を受けて船渠は危機を乗り越え、業績も向上していったが、同40年函館市の大火によって船渠にも被害があり、そのうえ2年後台風で船台が破壊されるなど、災難が相次いだ。この再建計画をめぐって株主、債権者などとの間で争いがあり、責任をとって社長を退任する。

退任後は、函館郊外七飯村の9町歩で農業を営み、軽井沢のときと同じく西洋野菜の栽培を手がけたが、種苗は外国に発注し、そのなかには幾種類かのジャガイモが含まれていた。ジャガイモは龍吉がスコットランドでとくに親しんだものの一つで、この栽培には情熱を傾けたであろう。このとき取り寄せたなかで、紫色の花が咲く品種の成績がよいことを認め、それが近隣の農家に伝わり、次第に広まっていった。農民たちは川田龍吉男爵が入れたジャガイモなので「男爵薯」と名づけることを願い、龍吉も快く承知し、ここに男爵薯が誕生することとなった。

7. 川田龍吉男爵の晩年とジニーの消息

七飯村での農業経営は、龍吉が函館船渠社長のときのことであるが、同社退任後は函館の西、渡島当別^{おしまとうべつ}に1,400町歩の山林原野を手し、ここでの耕作を生涯の生業にしようとした。当別の原野は彼にスコットランド時代を回想させ、ここでの営農に力を入れるようになり、次第に業績は向上していった。

しかし、晩年の龍吉は家族の不幸が相次い

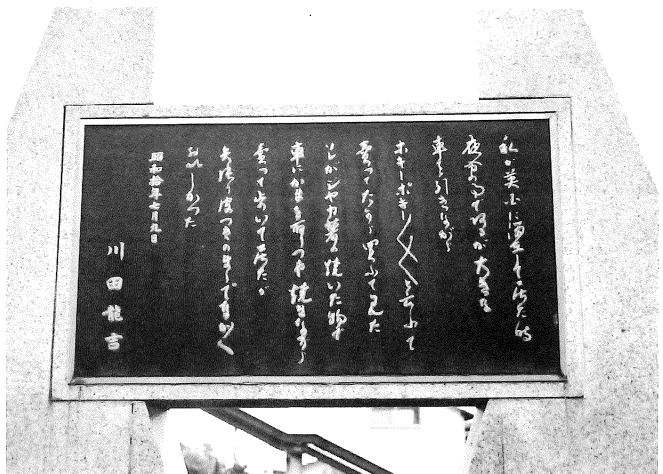
だため、決して幸せであったとはいえない。もともと頑固な彼は、これにより一層感情が激しくなり、身近の人たちも遠ざかるようになる。戦後の昭和23年(1948) 龍吉は92歳で洗礼を受けてカトリック教徒となり、同26年95歳で永眠した。

若き日の川田龍吉と別れたあと、ジニーはどうなったか、について知るのは難しかったが、英国の関係官公庁はじめ個人の骨折りで1886年6月にサンダーランドで服地商を営むアレクサンダー・スコットと結婚していることが判明した。ジニーはきっと、イングランドという出生地とは異なった地で出会った、自分と同じスコットランド出身のアレクサンダーと気が合ったのであろう。龍吉が楠瀬春猪と結婚する1年前であった。1896年アレクサンダーは死亡し、夫妻に子供はなく、かなりの資産をもっていたアレクサンダーは、そのすべてをジニーに贈与する、との遺言をのこしている。その後のジニーの消息は不明であり、龍吉が彼女に送った手紙は残っていない。

長くなったが、以上がこの書のあらましで、ほんとうに感慨深い。

8. 誠実さと教養の深さにひかれる

日本人が世界に広く住んでいる現在では、国際結婚はとくに珍しいことではないが、明



上 川田男爵記念碑（男爵資料館内）
下 同碑文

治初年では希れであったにちがいない。しかし文明開化のこの時代には、「日本人はすべからく外国人と結婚すべし」と真顔で説いた者もいた、とのことである。

この時代以降、国際結婚も次第に増えてはきているが、多くはヨーロッパ人、白人系米国人の男性と日本人女性のケースで、その反対の場合はかなり少なかったようであり、まして開国間もない頃は、日本人男性は欧米人女性から少なからず卑下、蔑視の目で見られ

たにちがいない。

このような環境のもとで、龍吉がこれほどまでに英国女性から親しまれ愛されたことに驚きを感じる。日本人男性は、少なくとも外見の点では白人に見劣りはするが、そのハンディを越えて白人女性から慕われるようになったのは、恐らく龍吉の誠実な人柄と教養の深さによるところが大きかったのであろう。書店からの手紙を受けるとすぐに、都合がつき次第店に伺うと返信したであろうし（龍吉の手紙は残っていないが、彼の性格からして必ずそうしたに違いない）、実際に店に行き、あらためて注文したことに誠実さがみられる。また、注文を済ませたあと、ジニーとかなり会話を交わしたが、その内容はいろいろ書物についてのことであって、外国人である龍吉が英国の書物に関して、書店員のジニー

と対等に話し合えることは、彼の教養の深さを物語っている。真の友情、愛情は、その人の外見よりも、出会いの場、人間としての内面の深さによって決まるようであり、眼の前に多くの同国青年が現れるにもかかわらず、龍吉に親しみを感じ、励まし、愛したジニーは、すばらしい女性であった、と思えてならない。

9. 人との出会いを大切に

人の運命は、もって生まれた素質によるところが大きいかもしれないが、それとともに生れ育った環境、境遇、人生観、世の流れ、人との出会い、などによって大きく影響されることを川田龍吉男爵の歩んだ道をたどって、あらためて強く感じた。とくに世の流れ、人との出会いが、もともと能力のある龍吉を押し上げているように思われる。幕末激動の時代、世の中がガラリと変わってしまうようなときには、現代の安定した時代とくらべ、思い切った決断力により道が開ける可能性は高い。龍吉はそのような時代に生を受け、父小一郎の才覚、向上心が川田家の社会的レベルを大いに上げたことに幸いされ、岩崎彌太郎、ヘンリー・ロブニツそのほかの高名人たちの理解をもらって、その才能を十分に伸ばす機会を与えられている。そして、ジニーとの出会いも、想いは叶わなかったが、その後の龍吉の歩んだ道に大きく影響したことは間違いない。

このような、人とのよき出会いによって、ジャガイモ男爵薯の誕生、広まりがあったと考えられる。貧しい郷土の家に生まれた龍吉は、境遇の点では決して恵まれていたとはいえないが、そのかわりに農業、作物を知り、



「男爵薯を讃ふ」の碑（五稜郭公園）

父の努力によって英語教育が受けられ、岩崎彌太郎ほかの人と出会い、それらの人たちから数々の便宜を与えられて英国での留学ができ、スコットランドの自然、ジャガイモなどの西洋野菜を知り、ジニーと出会い、父の遺産を受け継いで農地を手に入れて農業経営を

行う、など、これらがすべて凝縮されてジャガイモ男爵薯の誕生につながっていると思われる、そのうちどれが欠けても今日の男爵薯は、あるいはなかったかもしれない。

世の中は、見えない不思議な縁で結ばれている、とつくづく思うのである。

男爵資料館と五稜郭公園

函館から西に向かうJR津軽海峡線で渡島当別駅下車、駅前に男爵資料館があります。昭和53年（1978）に、川田龍吉男爵が拓いた農場跡の旧畜舎に設けられたこの資料館には、男爵が生前使用していた家具、生活用品、書籍などのほか、農場で使用した大農機具等が展示されていますが、牛がひづめを痛めないよう、畜舎の床が木造であること、外国書籍がたいへん多いことに気づきますが、そのうえ明治34年（1901）に米国で造られたロコモビル蒸気自動車は、ひときわ目をひきます。男爵は函館から七飯村の農場に行くとき、この蒸気自動車をを自ら運転しました。

敷地内には川田男爵記念碑もあり、男爵が姪の川田三七子に宛てた手紙「私が英国に滞在して居た時……大きな車を引きながらホキーボキー……と云うて売ってたから買ってみた……なかなかおいしかった」が碑に刻まれています。また、館の敷地内にはジャガイモ料理専門店もあります。

嘉永6年（1853）に米国の黒船が日本に來航、日米和親条約が締結されて箱館が開

港場となりましたが、北辺の防備強化のために新しい要塞を構築する必要に迫られ、いままでの城とは全く異なったヨーロッパの城郭都市をモデルとし、七年の歳月をかけて五稜郭が建設され、元治元年（1864）に完成し、箱館奉行所がここに移転されました。

五稜郭は直径500mの星形の五角形をして、周囲に堀をめぐらし、その総延長は1.8km、城内の広さは約250,000㎡（東京ドームの約5倍）です。大正3年（1914）に公園として開放されましたが、近くに高さ約97mの五稜郭タワーが平成18年（2006）に完成し、その展望台から見下ろすと五角の星形をはっきりと見ることができます。公園は函館市民の憩いの場として親しまれ、園内と周辺には1600本のソメイヨシノが植えられて春には咲き乱れ、夏には箱館五稜郭祭をはじめいろいろの催しがもたれます。城内には南北2カ所の橋を渡って入れますが、北の三の橋のたもとには、元北海道大学総長伊藤誠哉博士の毫になる「男爵薯を讀ふ」の碑が建っています。